

月刊「武道」誌で2012年1月から34回の連載……

結構大変でしたが、終わってみれば楽しかったなあ。昔の柔道着が半袖、短パンだったこと。撃剣興行なんていふ巡業見世物があつたこと。沖縄唐手の稽古は夜行性だったこと。双葉山の身体的障害のこと。植芝盛平の流転人生。嵩山少林寺白衣殿の壁画。などなど……初めて知ることばかりで、新鮮な驚きの連続でした。それも作り話じゃない実話。

武道の偉人たちの時代は、おおむね明治時代から戦後の復興期までということで重なります。文明開化、大日本武徳会、関東大震災、軍国主義と敗戦、GHQによる武道禁止令、戦後復興などが共通のキーワードです。そしてテーマとしては、武術から文化としての武道へ、戰技から人格教育の「道」へ、学校教育への組み込み、などが基本的な流れといえましょう。嘉納治五郎は武道家としてよりも教育者としての存在が大きかったように思われます。そして国際的文化人であつたことから、武道の中にスポーツの概念が持ち込まれます。武道が持つ精神性と競技性の二面は、今も重要な課題です。

自分なりに頼りない時代考証をしながら思うのですが、武道の偉人たちの時代は現代に比べ、実に『不便な』時代だったと思います。嘉納治五郎が11歳で兵庫から上京する時は、まだ鉄道もなかつた。双葉山の連勝の頃も電話は一般的ではなく、父の喜びの声を伝えたのは電報。植芝盛平や宗道臣が大陸へ渡つた船旅はどのようなもの

みてください。

【嘉納治五郎】柔術時代のコスチュームと雰囲気、最後の外遊時点からの回想の形式

【高野佐三郎】剣道家らしい骨太なキャラクター

【阿波研造】第3話の月を射抜くエピソード

【双葉山】第2話の父へ送金のエピソード（双葉山が描かれるのは押し入れから出た指だけという、僕としては快心の演出です）

【船越義珍】安里安恒のもとへ通う夜の稽古

【植芝盛平】第2話の銃弾を感じ取るエピソードと黄金体の悟り

【宗道臣】第2話の妹を亡くすエピソード、嵩山少林寺白衣殿の壁画

【園部秀雄と美田村千代】秀雄が美田村家に宿泊するエピソード（千代四女和子様に直接取材して挿入できた話です）

【鵜沢尚信】父・総司が日露戦争に出征する場面（そういう時代だったのだと…）

物語には結末があります。その物語が持つているテーマに従つて一つのけじめが付けられます。でも時系列表を考えてみてください。ある事件が解決しても、ある戦いが終わつても、恋が成就しても叶わぬまま終わつても、実は登場人物たちの時間はまだまだ続いていくのです。

この偉人伝も、偉人たちの最期で一つの決着を見ます。しかし、実は各武道の時系列はむしろそこが始まりだつ

だつたのでしょうか。でもそんな時代だから、人間が凄い能力を発揮できたのかもしれません。現代の我々は、人間が本来持つていた、本能、感性、身体能力などの多くを失つてしまつたのではないでしようか（とは言うものの、陸上競技や水泳競技の数字は確かに伸び続けています。うん……）。

大学でマンガのストーリー構成を指導する時に重要視するのが、「時系列表」です。登場人物たちの行動やエピソードを一旦全て時系列で整理し、その上で読者に見せる部分、見せない部分を配慮しながら物語を構成します。物語の核になる『わけ』といえるエピソードを読者に気づかれないように、さりげなく隠しておくのです。そしてその一部分をチラッと謎めかせて知らせておく。これが、いわゆる『伏線』になるわけです。そして、終盤では『伏線』をきっかけとして、伏せられていましたエピソードが読者の知るところとなり、それら全てを解決すべくクライマックスへと突入していくわけです。

この武道の偉人シリーズの場合も、まず年譜の整理から着手してきました。そして年譜を鳥瞰しながら、どの時点からの回想にするか、各話の区切りは、最終ラストはどんな方向性にするか、などを考えます。このプランの段階がとても楽しいのです。

九つのマンガの僕なりのおススメ見どころをご紹介したいと思います。あとがきに見どころを書くのも、おかからこそ偉人なのです。

『鵜沢尚信と日本の銃剣道』のラストにメッセージさせていただきましたが、『平成の平和国家にあって、武道はいかに在るべきか』。これが私たちが偉人たちへなすべき返礼だと考えます。

素晴らしい仕事に関わらせていただきました。

日本武道館の松永光会長、白井日出男理事長、ありがとうございました。三藤芳生理事・事務局長、内田康介月刊「武道」前編集長、またまたお世話になりました。良い企画を立ててください、資料収集・考証・校閲にひとかたならぬご協力をいただきました担当編集者の青木元樹様には特上スペシャルな謝意を表させていただきます。

そして武道の神様！ お近くにいらっしゃる偉人の皆

さんによろしくお伝えのほどお願い申し上げます。

平成二十七年 夏 湯けむりの泉都・別府にて

田代じんたろう